

2009年度第1回物学研究会レポート

「つながる技術」

小山薫堂 氏

(放送作家、脚本家、東北芸術工科大学教授、N35inc／オレンジ・アンド・パートナーズ代表)

2009年4月10日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

2009年度物学研究会の活動テーマは「新しいパラダイムの探求」です。

第一回目の講師の小山薫堂さんは、第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」の脚本で読売文学賞を受賞。その活動は、脚本のみならず、テレビ番組の企画構成、自ら主宰するオレンジ・アンド・パートナーズは「新しい価値を創造する会社」として、商品、デザイン、MD開発を行っています。このような小山さんの活動は、人と人、人とモノ、コンテンツ、メディア、場所、機会を「つなぐこと」といえるかもしれません。

「つながる技術」

小山薫堂 氏

放送作家、脚本家、東北芸術工科大学教授、
N35inc／オレンジ・アンド・パートナーズ代表



●つなげること、サプライズすること

初めまして、小山薫堂と申します。今日のテーマは「つながる技術」としました。実は今日出版される本の最初のタイトルが「つながる技術」だったのです。最終的には「人を喜ばせるということ」に変わりましたが、今という時代は、「つながること」が重要な鍵だと思います。どうやったらいろんな人とつながるか。以前、ある人に僕の企画発想術を分析してもらったところ、「新しいものをゼロから生み出すというよりは、『つなげること』によって新しさを生むという発想術」と分析されて、確かにそうだなあと感じたことがあります。

そしてもうひとつ、僕にとってつなげることと同じくらい大切なことが「サプライズ」です。僕はだれに対してもサプライズすることが大好きで、人をビックリさせることばかりやっています。…ということで、本日発売された本の最終タイトルは『人を喜ばせるということ——だからサプライズがやめられない』となりました。

さて、今日は映像をいろいろと持ってきましたので、それをご覧いただきながら、僕流のつながる技術、サプライズづくりについてお話しできればと思います。

●サブライズ1・・・映画『おくりびと』

まず、映画「おくりびと」の話をします。

制作経緯を振り返りますと、2005年10月12日付の日記に、「本木雅弘さん主演映画の脚本の依頼が来る。今までにない気の引き締まる仕事。頑張っとうまく着地させてカンヌに行きたい！」と書いてあります。僕は当初、カンヌ映画祭に行くために頑張ろうと思っていたんですね。早速10月30日から1泊2日で、映画の舞台になった庄内に出向いてシナリオハンティングをしました。そこで納棺師やお坊さんといった「死」を扱っている人たちからお話を伺って、物語の構想を練っていきました。確か原稿の締め切りは、依頼から2カ月後の12月12日だったのですが、その日を迎えてもまだ1行も原稿を書けていませんでした。結局年明け1月10日頃から書き始めて、ようやく1月31日に仕上げることができました。

最初のタイトルは「納棺夫日記」でした。脚本の素となった青木新門さんの同名の本を俳優の本木さんが偶然見つけて、これを映画にしたいと、脚本を僕に依頼してきたのです。ところがこの本、テーマが非常に宗教的で、内容も重たくてシリアス、どうやっても映画にするには難しそうでした。そこで本木さんの事務所の小口健二社長に相談して、脚本は原書からの引用が2割、残り8割は僕の創作というかたちでまとめました。ところが、原作者の青木さんにお見せしたところ「これは私の本とはまったく違う」と指摘されてしまって、一時的に映画化が真空分解しそうになりました。結局、小口さんの英断で僕が全面的に書き直すことになった。その気持ちを受けて僕もすごく頑張っって、『おくりびと』第1稿を2006年8月22日に書き上げたのです。

振り返ると、あのとき青木さんの反対がなかったら、映画『おくりびと』は生まれてなかったわけで、今となっては青木さんに感謝しています。そして小口さんは完成した映画を見て、僕と握手をしながら「すばらしかった、本当によかった。これを守ってよかった」と言って下さった。しかし、その小口さんは数カ月後に亡くなって、この映画がアカデミー賞をはじめたくさん賞を受賞したことはご存じない。こんな経緯から、『おくりびと』は僕にとっても想いがものすごくある作品なのです。

さて、アカデミー賞外国語映画賞は、まず各国からひとつの代表作品が選ばれて、それをアカデミー賞の事務局に送って、最後に5作品がノミネートされるというシステムになっています。その5作品の決定は、本選の1カ月前、2009年1月22日でした。僕はアカデミー賞に行けるか行けないかというドキドキを、自分1人で味わうのはもったいないなあと思いました。そこで社員全員に「ノミネートされたら、みんなをLAに連れていきます！」と宣言しました。そしたらその瞬間にみんなの目の色が変わって、会社が一枚岩となってアカデミー賞を目指して動き始めたんですね。1月22日、あいにく僕はパリにいたのですが、うちの会議室はまさに選挙事務所状態で、ホワイトボードに「Yes, We Can」と書いて、LAからの知らせを今か今かとみんなで待ったそうです。そして、かかってきた瞬間に「残りました」って大喜びして、ある社員が泣きながらシャルル・ド・ゴールにいる僕に「やりました！！」と電話してきました。その泣きは、ノミネートされたことか、それともLAに行ける喜びなのかは分かりませんが……。

それで、みんなでLAに行きました。その上、僕は発表の瞬間を社員みんなで共有したかったので、ある友人の家に行くことにしました。彼はアメリカ人で、偶然銀座のすし屋で隣同士になったおじさんです。日本語を全くしゃべれないのに、「アワビの肝」とか「くちこ」を頼んでいるので、変わっている人だなあと思って僕から声をかけて、その日は名刺交換だけをして別れました。そうした

ら数日後メールが来まして、また日本に行くのでうまい店を教えてくださいと書いてあって、それ以降食仲間になってしまったというわけです。昨年にはとうとうLAの彼の家遊びに行きました。そして何とビバリーヒルズのだ真ん中に家があって、暖炉が7つ、プール、ジムもある超豪邸だったので。そのおじさんにアカデミー賞の授賞式でLAへ行くんだと言ったら、「ぜひうちに来い。パーティーするから、一緒にみんなで見よう」と誘ってくれたのです。そのときの映像がありますのでご覧下さい。

(映像を見ながら)

この社員旅行中に、ひとつサプライズを仕掛けました。社員の中に広末涼子さんの大ファンがいるので、授賞式のためにLAにいた広末さんをお願いして、彼の誕生日プレゼントを手渡してもらいました。

さて、受賞の瞬間です。僕はしっかり心の準備をしていたつもりだったのに、興奮のあまり気づいたら受賞が一番関係のないシェフと抱き合っていました。

さて、こうしたすてきな経験をして帰国すると、今度は日本のみなさんからたくさんの祝福をいただき、再び幸せをかみしめることができました。中でもうれしかったのはかなりのボリュームある一通の手紙をもらったことでした。映画の舞台になった庄内にある余目第二小学校で6年生の担任をしている佐藤修太郎さんという先生から送られたものでした。開くと「突然のお手紙で恐縮です。私の学校に、映画『おくりびと』をだれよりも熱心に応援し続けてきた子どもたちがいることをぜひ知っていただきたくて、お手紙させていただきました。…子どもたちは『おくりびと』という映画を通して庄内に誇りを感じ、アカデミー受賞の際は大喜びでした。その子どもたちが3月19日に卒業するので、一言、メッセージをいただけませんか」と書いてあり、返信用の封筒と一筆せんが1枚だけ入っていました。

僕はメッセージを送るだけで終わらせたくないと考えて、卒業式前日の3月18日に一晩だけ徹夜をして、『余目第二小学校を卒業するみんなへ』というDVDをつくりました。それを当日写真に届けてもらったのです。そのビデオをご覧下さい。

(DVDを見ながら)

子どもたちは本当に喜び、先生は号泣してくれたそうです。他の仕事の締め切りを飛ばしてまで(笑)、ビデオを作ったかいがあったなあと思いました。

●アイデアの種は「思いやり」

その1. ブログの使い方

僕はこんな感じで、普段から週に1回ぐらいのペースで仕事とは関係のないサプライズをやっています。しかし、自分の中では仕事もサプライズも企画という意味では同レベルなのです。常に何かおもしろいことがないかなあと探していて、見つかったら、そのアイデアの種を自分の心のポケットに入れておいて、いつもたくさん持ち歩いている。感覚的には、このアイデアの種をどの土壌に撒こうかを日々考えているのです。テレビかなあ、雑誌かなあ、それとも小説、いや映画かなあ。あるいは、仕事にならないから遊びにするのがいいかなあというふうに…。種はすべて仕事ではなくて、自分の周りの何かに使ってもいいと思うんです。

例えば、今から数年前にブログという装置ができたときに「あっ、これはおもしろい！」と種のひ

とつに加えました。そしてまずは遊びに使ってみようと思い立ったのです。ちょうどその頃、東京FMのパーソナリティの柴田玲さんがハワイで暮らすというので、柴田さんへのプレゼントとして、こんな風にブログを使ってみたのです。まず柴田さんを送るブログを内緒で立ち上げて、知り合いがメッセージを記す。そして本人がハワイについているところを見計らって、メールで「こんなブログ知ってる？」ってアドレスを送り、彼女がクリックすると、なんと自分が主役になったブログでみんなからのメッセージを受け取る。ブログの使い方としてすごくすてきなあとだと思います。

このように、僕の仕事や企画は、遊びの中から生まれます。ブログも遊びをきっかけに「新しい、あっ、こういうサイトをつくったらいいんじゃないかな」とか、「ブログを変化させた発想で番組を作れるんじゃないか」とか、いつもいろいろ発想をしています。

その2、受付がパン屋さん

うちのオフィスの受付は売店です。会社をつくる時受付嬢は置きたいと思ったんですが、十数人の小さな会社に専用の受付嬢をおいても人件費がもったいない。けれども電話が置いてあるだけの受付では何か殺風景だし……。どうすればいいかと考えて、受付嬢が自分のお給料を稼げるシステムをつくれればいいと考えました。早速、建物の1階にある店舗物件を探しました。

…ということで、我が社ではオフィスの受付部分がパン屋さんになっています。事務所のある神谷町はランチ難民で有名なエリアでしたので、周りの会社員が「パン屋ができたよ！」と喜んでくれたら嬉しいなあと思いました。それにパン屋だとアイコンになりやすいでしょ。例えば、お客様に場所を説明するときにも「神谷町の出口を出て、左側に歩いてきていただくとオレンジ色の看板のパン屋がありますので…」と分かりやすい。お客様は、パン屋の横にある扉を開いて中に入っていると、そこがオフィスになっていて、ゆったりした会議室もあって、何となく会員制の隠れ家バーに入ったような気分になります。何より、会議中におなかがいっぱいなら、いつでも社員価格でパンが買えるというわけです。実はこの「パン屋+オフィス」をグッドデザイン賞に出しました。コンセプトワークとしてかなり自信があったのですが、1次審査で落とされてしまいました。そのとき以来、僕はグッドデザイン賞ってどうなの？って思っています。

その3、勝手にテコ入れ

6年ほど前から「日光金谷ホテル」の顧問をやっています。きっかけは、お客の一人として泊まりにいったときに、すごくいいホテルなのに使われ方がもったいないなあと感じたこと。例えば明治時代の歴史的建築が倉庫になっていたりする。そこで、勝手なお世話なんですが、たまたまいらしたホテルの社長さんに「小山という者ですけど、もったいないですよ。その倉庫、僕だったらラウンジとかもっと活用しますよ」と話しました。そうしたらその後たびたび電話をいただくようになって、いろいろ相談をもちこまれるようになりました。「勝手にテコ入れ」がきっかけで、とうとう顧問として仕事をするようになったわけです。

最初に僕がやったことは、名刺づくりです。金谷ホテルの課題は、従業員のやる気をいかに喚起するかでした。すばらしいホテルなのにそのことをだれも分かっていない。彼らの意識改革とやる気を起こさせる仕掛けづくりが第一歩だと考えたのです。

どういうことかと言いますと、みんなを集めて「皆さんは金谷ホテルのどこかすばらしいと思うか教えてください」と尋ねました。そしたら、厨房の人は昔から使っているフライパンだとか、フロン

トマンは回転ドアがいいとか、客室担当者は昭和39年から使い続けている何号室のごみ箱など、いろんな意見が出てきて、その一つひとつが金谷ホテルの魅力を物語っていたのです。それらを全部写真に撮って、最終的に30点に絞りこんで従業員70人の名刺に印刷しました。同時に館内にポスターを掲げて、「みなさん、ご存じでしょうか。金谷ホテルの社員は、それぞれ違う図柄の名刺を持っています。全部で30種類あります。全部集めると、金谷ホテルの小さな写真集ができ上がります。なので、お客様、どうぞ社員に名刺をおねだりして、小さな写真集をつくり上げてください」とメッセージしました。そうすると、お客さんが名刺を介してホテルマンに話しかけるようになり、もともとシャイな金谷ホテルの社員たちが自然なかたちでお客様とコミュニケーションを取れるようになる。次にやったのが「N35ルーム」プロジェクトで、話題づくりを狙いました。

金谷ホテルの広告予算は年間240万円、このお金を掛けて倉庫になっていた部屋を改装しました。でもただの改装ではありません。『マンスリー・エム』という雑誌との共同企画で、「理想のホテルの部屋をつくる」というタイアップ記事の一環として行ったのです。普通、雑誌広告はページ150万円くらいしますから、記事として掲載できればすばらしいことです。広告予算であった240万円は、斜めだった床を修理し、壁紙を張り替え、天井に白い鷲を張るだけで終わりました。そこで僕が知人友人に電話をして、アルフレックスからはソファ、日立からはWoooという大画面テレビを、そしてオーディオはL I N Nなどの備品を無料で提供していただきました。

これで、金谷ホテル、掲載雑誌、家具や家電製品の提供者の3者全員が満足できるというわけです。中でも、金谷ホテルが一番得しましたね。倉庫だった部屋が広告費で新しくなり、ただで備品がそろい、現在では一番稼働率の高い部屋になり、さらに雑誌掲載を機に広告の役割も果たした。240万円はすぐに回収できたということで、このプロジェクトは成功しました。さらに「ホテル・イン・ホテル」という言い方をすることで、ホテルの中にあるもうひとつのホテルという特別感が、僕はすごく成功した要因だったんじゃないかなと思っています。

以降、いろんな「何とか・イン・何とか」があるのではないかと考えるようになりました。今月からは、「新聞・イン・新聞」という企画が始まります。これは「SANKEI EXPRESS」というタブロイドの日刊紙から連載を頼まれたものです。「新聞・イン・新聞」という発想で、読んだ人が元気になるような「活字のビタミン」というコンセプトで、昔の学校新聞とか学級新聞みたいなものを目指しています。タイトルは「オレンジ新聞」。僕らの会社のブランディングにもなるし、社員が新聞部員になった気分を味わえるというわけです。

●無駄が大切

僕はスタッフに対して、どれだけたくさん無駄をさせてあげるかを考えています。お肉でも脂身の多い肉ってうまいじゃないですか。脂身がいかに大切かってことだと思うんです。

実はこの4月から東北芸術工科大学で企画構想学科という学科を立ち上げて、学科長をやっています。入学式では、学生に対して「人生でこれほど自由な4年間はないから、肉でいうと脂身のような時間を過ごしてほしい。ただし、これが本当に意味のない脂身になるか、肉のうまみとしての脂身になるか2つあると思うから、うまい脂をつくるように頑張ってください。僕は、みなさんの大学生活が最良の分岐点になるよう、人生のコンシェルジュとして頑張ります」と約束をしました。

彼らの入学試験は企画力を問う特殊な試験でした。僕は大学から入学式までしばらく間が開いてしまうので、合格者に何か課題を出してほしいと頼まれて、「身の回りにあるもったいないと思うものを20個あげなさい。その20個が、それぞれどうすればもったいなくなくなるか、それを考えなさい」というテーマを出しました。そうしたら、結構おもしろいアイデアが出てきました。僕は驚いて、こんなにユニークなアイデア持っている学生がいるのであれば、僕の仕事も一緒にやってもらおうかな（笑）と思ったほどでした。

●企画とはサービスであり、幸せづくり

時間がだんだんなくなってきましたが、もうひとつだけサプライズビデオをご覧いただきたいです。

僕はいつもスタッフや学生に言うことは、例えばおいしいものを食べたときに何となく幸せな感じになる。恋をしたときに幸せな気分になる。それと同じように、すごくいいアイデアやデザインが生まれたときには、何ともいえない幸福感に包まれるじゃないですか。それを忘れないでほしい。僕らは、その何ともいえない気持ちよさを味わうために、いろんなサプライズやだれかを喜ばせるということやるんだよ…とっています。これからお見せする映像は、一番最近、幸せな気分をつくりたいなあと思ってやったことです。

うちには大地本夏君という会社の脂身みたいなやつがいるんですね。そういう人材って会社には必要じゃないですか。大地本君が誕生日で、何かサプライズをしなきゃいけない。実はうちでは、誕生日を迎える本人以外は、社員全員がサプライズに参加する決まりがあります。彼のときは僕が考えました。それは、仕事のために毎月2回、僕と副社長の軽部、そして大地本の3人で大阪に出張するんですが、その帰りに僕と軽部の2人が彼の実家のある島根に行って、ご両親に会って来る。その様子をビデオにとってきて、誕生日当日に「今、おまえに足りないものはこういう要素なんだ」と大地本に言って、そのビデオを見せる。そういうサプライズです。

（ビデオ ある出張の記録を見ながら、小山さんの解説。

仕事をすませた大地本は、大阪から1人で先に東京に戻ります。

僕らはプロペラ機で島根に行き、レンタカーを借りて大地本の実家を訪ね…

するとご両親が迎えに出てくれて、実家にお邪魔して、

大地本が昔使っていた部屋を案内されて、いろいろチェックする。

ご両親には、スライドショーで息子さんの近況をお見せする…)

僕はこういうサプライズをいつも一生懸命やっています。こうした行為を通じて社員に分かってもらいたいのは、企画とはサービスであり、思いやりだということです。だれにこれを届けようか、だれを笑顔にしようかということと、自分がつくりたい作品のバランスが大切だと思うんですね。自分がつくりたいものばかりをやっても人を喜ばせることはできない。相手を思いやって、しかもそれが行き違いにならないことが大切です。

●人とつながる技術

ちょっと時間が過ぎてしまいましたが、最後に人と人のつながりについて、2つの出来事をお話します。

今日、この会場にいらっしゃると思いますが、吉田道生さんから「小山さんと親しくなるために」と、この3週間で3通の手紙をもらっていました。この間、僕は海外出張があったりしてゆっくり郵便物を確認できていなくて、今日手紙を発見してこんな粹なことをされたら悔しいなあと思ひまして、慌ててお返事を書いてきました。吉田さんの手紙に比べると薄っぺらなものですが、後でお渡ししたいと思います。

でも、「どうつながろうか」を本気で考えると、もちろん偶然力も大きいですが、身の回りにはいろんなチャンスが転がっていて、それに気づかなくて毎日を過ごしている人がいっぱいいて、本当にもったいない人がたくさんいると思います。

ふたつめの出来事としては、最近こんなことがありました。少し前に『レバレッジ時間術』などの著書で知られる本田直之さんとハワイでたまたまお会いして一緒に食事をしました。帰国してからある日、日比谷線に乗ったらその本田さんの本をとて熱心に読んでいる30歳ぐらいのサラリーマンがいました。彼は満員電車の中で、右手に赤ペンを持ち、附せんをいっぱいつけて彼の著書を一生懸命読んでいました。そこで僕は、「彼と本田さんをつなげることによって何かまたひとつのドラマが生まれるのではないか。例えば本田さんが彼に『レバレッジとは何か』を講義するスタイルの本ができるんじゃないかなあ」とかいろいろ想いを巡らして、思い切って彼に声を変えてみようと考えました。そして、散々迷った挙句、中目黒のホームで横浜行きの電車を待つ彼の肩をチョンチョンと叩いたので。そしたら、「えっ！」という顔で振り返られました。でも僕はめげずに、「突然ですけど、あなたが今読んでいるその本は、僕の友人が書いたものです。もしあなたが彼とつながりたいと思ったら、僕に連絡をください。いつでも紹介しますから…」といって、あらかじめポケットに用意しておいた名刺を渡して、その場をバババーッと走り去りました。その後しばらくの間、彼は一体どんな人なんだろうかと想像し、メールが来ないかと楽しみに待ちました。本田さんにもすぐ電話をして2人で盛り上がりました。でも、結局メールは来ませんでした。

何で来ないんだろう…と僕は思いました。もし彼が僕だったとしたら、まず名刺の名前くらいはパソコンで検索すると思います。ピッピッと検索すれば何か情報がでていようから、僕が怪しい人間ではないと分かれば、メールで連絡してみようと思うのではないかな…。未だに、あの彼はどこで何をしているんだろうなあと気になっています。そして僕は、日々つながろうと思ひながら生きております。 どうもありがとうございました。

以上

2009年度第1回物学研究会レポート

「つながる技術」

小山薫堂 氏

(放送作家、脚本家、東北芸術工科大学教授、N35inc／オレンジ・アンド・パートナーズ代表)

写真・図版提供

01；物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2009 BUTSUGAKU Research Institute.